

第3回放射線災害・医科学研究拠点 ふくしま県民公開大学の開催報告

【はじめに】

福島県における原子力災害等からの復興に向けた取組について、専門家や学生からの提言、そして意見交換などを広く県民の皆さんにお聞きいただき、これらの知見を共有することで今後の復興の一助とすることを目指し、2019年2月23日、福島市内で「県民公開大学」を開催しました。

東日本大震災・福島第一原子力発電所事故発生以降、国内外から多大な支援を受け、これまでの復興に繋げてくることができました。この福島における災害の教訓と復興の経験を世界の財産として共有することが、世界の持続可能な社会づくりに役立つのではないかと。

第3回となる今回は、「受援」する立場から「支援」する立場へと視点を変え、復興の在り方を考えることにしました。

冒頭、福島県立医科大学・谷川攻一副理事長が挨拶を行い、引き続き文部科学省学術機関課長・西井知紀様、福島県副知事・畠利行様にご挨拶をいただきました。

まず、フォトジャーナリストとして活躍されている安田菜津紀さんに「東北と世界、架け橋を築く」と題して基調講演をいただきました。続いて、福島県立医科大学医学部の学生グループが「学生からの提言」として発表、最後に、日本科学技術ジャーナリスト会議理事・小出重幸さんをファシリテーターとして、安田さん、学生、広島大学・長崎大学・福島県立医科大学の若手研究者によるパネルディスカッションを行いました。

【基調講演】

フォトジャーナリスト 安田 菜津紀さん



「東北と世界、架け橋を築く」と題した講演では、東日本大震災の被災地である岩手県陸前高田市や福島県大熊町、シリアなどの中東地域の取材活動での写真を交えながら、そこで暮らす人々の様子についてご紹介いただきました。

陸前高田市で、7万本の松林の中から1本だけ津波に耐え抜いた「奇跡の一本松」を見たとき、被災者に何か力を与えてくれる希望の象徴と感じ、夢中でシャッターを切った。しかし、それを一番に見せたかった陸前高田市で被災した義理のお父様からは、「津波の威力を象徴するもの以外の何物でもない」、「見ていてつらくなるし、出来れば見たくなかった」と言われたというエピソードを紹介されました。写真家としてこれこそ伝えるべき情報と思っても、発信する前に受け手の声にもっと耳を傾けることが大切であるとお話しになりました。

また、シリアで空爆や銃撃によって壊された建物を戦争の記憶として一部保存しようという初めての試みが行われているが先に進まない状態になっていること、大熊町において亡くなった方の追悼と震災の記憶を残す伝承の場となるよう畑に

菜の花を植えるプロジェクトがあるものの、行政の方、町民の方、そしてご遺族の方々とのコミュニケーションがまだまだ必要であることが紹介されました。これらの取り組みに共通するキーワードとなるのはコミュニケーション、対話であると締めくくりました。

【学生からの提言】

(福島県立医科大学医学部4年 及川 孔 さん)



福島県立医科大学の学生グループが「伝えた気持ち、受け取る力」と題して発表を行いました。

学生たちは、被災した福島から世界に発信できる情報は何かという観点で議論しました。震災後に専門家が発する情報と、それを受け取る被災した方々のコミュニケーションがより困難を増してきていると感じたことから、「専門家と一般の方のコミュニケーション」というテーマについて解決策を探り、福島の教訓として世界に発信できるのではと考えました。

最初に専門家と自治体職員の方々へのヒアリングを行いました。その結果、専門家と一般の方のコミュニケーションの問題点を、①一般の方はリスクのとらえ方に慣れていなかった、②遠くの専門家より身近な知り合いの情報を信頼しがち、③正確な情報を効率よく伝える体制ができていなかった、④日常から一般の方と専門家とのつながりが薄かった、の4つにまとめました。

4つの問題点の解決策について議論を深めるうちに、その根底にある課題は「受け取る力」なのではないかと思に至りました。つまり、一般の方の真のニーズを把握するためにはどうすればよいのかということに気づく力の必要性です。そこで、専門家と一般の方との間に橋渡し役を担う存在をつくることを思いつきました。本音で話し合うことができれば真のニーズを容易に把握できる半面、本音を話し合える関係になるには時間がかかってしまうため、災害時など有事の際には、平時から機能している地域住民の健康を見守る保健の専門職に橋渡し役が加わるという考え方です。

看護師やケアマネージャー、あるいは同等の役割を担う人材を、一般の方々との橋渡し役として専門家集団の中に作っていかねばならない、とまとめました。

学生グループメンバー

医学部4年：及川 孔

2年：山地 弘高、新津 順也

3年：田内 雅士

6年：竹口 優三

【パネルディスカッション】



パネリストには、
・安田菜津紀さん
・久保田明子さん

(広島大学原爆放射線医科学研究所・助教)

・阿久津・シルビア・夏子さん

(広島大学原爆放射線医科学研究所・助教)

・熊谷敦史さん(福島県立医科大学・講師)

・村上道夫さん(福島県立医科大学・准教授)

・折田真紀子さん

(長崎大学原爆後障害医療研究所・助教)

・佐藤奈菜さん

(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・大学院生)

・及川孔さん(福島県立医科大学医学部4年)

・山地弘高さん(福島県立医科大学医学部2年)

の9名にご参加いただき、日本科学技術ジャーナリスト会議理事・小出重幸さんにファシリテーターを務めていただきました。

パネルディスカッションは、及川さんから発表があった「学生からの提言」に対して、パネリストにコメントいただくことからスタートしました。

安田さんは、陸前高田市の経験から、震災後の情報収集の手段が限られた中で、地元新聞社の方が配った新聞が、地元根付いたメディアという要因から信頼性が高く、橋渡し役の一役を担っていたとお話されました。

久保田さんからは、大事な橋渡し役は一体どのような教育や経験をした人が、どのような所属でやっていくのがよいのかという質問を学生に対して投げかけました。及川さんは被災者と同じような経験や同じような世代の方がいいと答え、山地さんは看護師のような資格を必ずしも持っている必要はなく、一人ひとりが自分の伝えられることをほかの人に伝えるという橋渡しができればよいのではないかと答えました。

阿久津さんは、東日本大震災や原発事故を経験したことは、科学に対する向き合い方や価値観、風評被害の生まれる過程の重要性を認識すること

ができたと感じを述べました。

熊谷さんは、住民側にしっかりと足を置き、住民側のさまざまな問題を理解できる立場で意見し、かつそのガイドときちんと橋渡し役ができる存在として、福島では保健師が大きな役割を担っており、大変な状況にあった福島で支えになってきたと話しました。

村上さんからは安田氏の講演の中であった「奇跡の一本松」の写真が見る人によって価値が違うという事例について、写真を撮ってどのように伝えようと意識しているかと質問しました。これに対し安田さんは、誰かが取り残されていないか、その取り残された人たちが今、何を感じているのかということに自覚したうえで、写真を見せたときに慎重に言葉を選ぶことが大切だと述べられました。

佐藤さんは、大学院で看護・保健について学んでいる自身の立場や経験から、今考えていることを述べました。

海外での体験の話に移り、熊谷さんから、ベラルーシでは政府が発信する放射能に関する情報への信頼が低いと、代わりに大学の医者・研究者や海外の研究者が協力して団体を作り情報発信をしたり、自分たちで食べ物の汚染状況などを測っており、しかも子どもたちが学校で測るという取り組みが行われていることが紹介されました。

災害時のコミュニケーションについても議論が及び、折田さんから、震災当時は専門家から大人数に対して「これはいい」「ダメ」と一方的に説明していたが、時間が経ち状況が安定していく中で、個別のニーズにどう応えていくのかということと、個別のニーズにどう応えていくのかということと、それがリスクコミュニケーションとして大切であり、そのためには、少人数のグループによる対話形式のコミュニケーションが有効であるという話がありました。

会場からは「ものづくりにどんな期待を抱かれていますか」という質問をいただきました。それに対して安田さんは、福島のお酒やシリアのアレポ石鹼を例に、現地に何度も訪問することは難しいが、それらを意識的に買い、飲むことや使うことで現地のことを思い出す、遠くにいても、ものを買うことが支援につながり、支援の輪を広げやすいと話されました。

最後に小出さんが、ディスカッションの締めく

くりとして、教育、そしてコミュニケーションの重要性を改めて指摘され、終了しました。

【おわりに】

福島県立医科大学・大戸斉総括副学長が、「福島はたくさんの人に助けられてここまで来た。ここで得られたことをいつかほかの人のために役立てたい」と閉会の挨拶をし、県民公開大学は盛会のうちに終了しました。